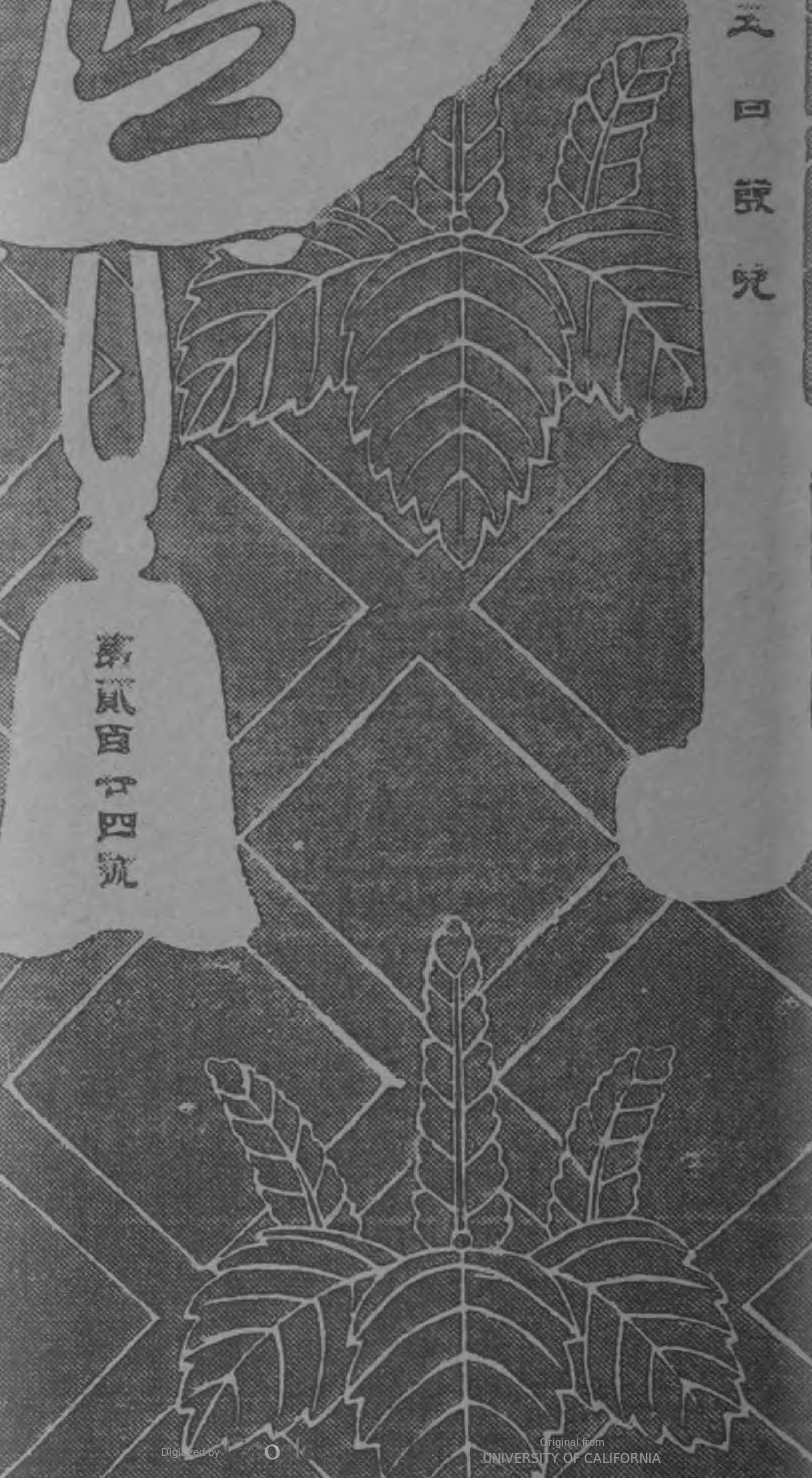

三回發兌
第貳百廿四號

短歌

東久世通禧　久我建通
鍋島直大　津輕承昭
水野忠敬　宮地嚴夫
北畠久政　坂正臣
萩原嚴雄　岩崎勝從
蜂須賀隨子　鍋島榮子
前田朗子　西四辻茂子
柳原愛子　小池道子
大谷章子　松下健子
小川直子　中島歌子

定價 … 六月分金 拾五錢
十二冊一年分金壹圓
全國無遞送料

明治三十四年三月四日印刷
明治三十四年三月五日發行

編輯兼發行人　川崎南陀
印刷人　茜木良雄

東京市京橋區築地二丁目二十二番地
發行所　國光社

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
發賣元　靜思館
（電話本局一千三百七五番）

[illegible]
係る事務は國光社雜誌部に於て取
京市京橋區南傳馬町壹丁目七番地
ひ候事に致候間自今國光及女鑑に
金、御通知等は總て必靜思館宛に
候也

代之武士

全一冊假洋裝頗美本
定價金四拾錢郵税六
錢●郵券代用必ず一
割增のこと

眞相と變遷とを論じ兼て上下三百年間の風敎を叙し筆鋒委々時に當
武士道の關係を尋繹論明せり故に本書の如きは一面に於ては江戸風
也初版は一ヶ月に滿ずして盡き第二版を發行あすや又當さに欠乏を
歡迎せらるるかを知り得べし

永錧書店……

賣捌所 富山房 ●東京堂●勉强堂 ●林書店●岡崎屋



學は人のためにすと古のかしこき人はいへり。己の
むがためにする實學なり。人のためにすとは人に知
なり。學問の本意は、己が身を修めむためなれば、
はらず。たとへば、食するものゝ、我が飢をやめ身
たゞ、我が腹にみちなんことをのみ思ひて、さらに、

其の多を加ふるといへども、この本意を誤るものゝ
しことに甚しきを見る。温き父母のふところを出でゝ、
其の志おほざりにして可からむや。然るに、或は、た
を得むことをのみ庶幾ひ、或は、たゞ、紅袴を着、書
校舎に出入することを許さるゝの栄を得むがために所謂
如くては、其の得るところよりも、失ふところの非常
学問大につとめざるべからず。然れども、また、其の



眞佐子
封疆を守る
れかしと祝
けるやう、

きにあらず。蓋し、堯は聖人なれば、凡人の心を推定して斯くいひけんも、自ら、好みて子孫なきを願ひ、財貨を賤み、長命を厭ひしにはあらざるべし。唯、子孫多きも教ふること能はず、且つ、不義の富貴を望むは、亂の始なり。亦、社會に毫も貢献するところなくして、宇宙に寄生するは、こよなき恥なり。堯はこれらの道理を諷刺せんため、故ら、かかる祝詞を辭せしものとしるべし。或は堯の治蹟は、全く無爲の政策を尊びしため、わざと斯く辭

於て勝國とな
殖民に於ても、
男子に關係す
待たざるべし。
。懷胎時期短
ず。おのれは、
することと能は
りも早衰する

少きが如し。たとひ多しとするも、輭弱なるは事實なり。甚しきは、子孫多きも、幼にして死するもの少からず。相摸の歌に、

何ごともこゝろにあらぬ身なれども
　このたからこそまつはほしけれ

と。現に、世上の母たるものにして、かゝる願望を有する婦人は、決して、少からざるべし。されど、如何せん、母體の薄弱なるは、子孫少なき原因なれば、先づ、體力を養はざるべからず。凡そ、

の萎失するに
らんか。
ー

我　歴

奨勵する事
の大本を論
依て予は、
事績に倣く

る、造化の主宰にましまし、諸の神等、又此の宏大ある天地をも鎔造り給ひて、今も猶萬の大本を統治し給ふいとも奇き妙ある靈德を有し給ふ大神あり。さて、此の大神の奇き妙ある御功德に依りて、先づ高御產巢日大神、次に神產巢日大神の二神生れ給へり。此等大神の御名產巢日は生產靈の義にて、互に產靈の御功德を持分まして、專ら天御中主大神の御功業を輔佐し給へり。斯て、其の天ノ御中主大神、二柱產靈の大神の御功德に依りて、天地草創の業將に其の緖に就かんとせしが、

は女神にましま
始まらざる時な
嫁がせおはしま
婦とならせ給ふ
此の二柱大神の
し奉るに、此の
活によりて根に
して、彼豊雲野
、しき泥に爲り

功業にて成就せし砂泥を、凝結給へる神なり。其は杙と云ふは、泥にまれ土にまれ凝結て其の物を保つ由の名なり。今も海中河中に杙を立てゝ、浮ばんとする砂泥を保たしむることを思ひ合すべし。

次に意富斗能地神、妹大斗乃辨神生れ出で給へり。此の意富斗能地神の御名の義は、意富も地も共に例の尊稱の辭にして大地乃遲神なり。此の神は彼角杙神、活杙神の凝結て保てる砂泥を、大地に連

以上宇比地邇神其の妹須比智邇神より、淤母陀流

斗乃辨神の御富斗能地神のり分ちて、愈生れ出で給へ神にて彼の大邊の面を、よ阿夜訶志古泥淤母陀流神の可に惶く造り功を成就せん

以上宇比地邇神其の妹須比智邇神より淤母陀神其の妹阿夜訶志古泥神に至る迄八柱の神等の御功績を熟考するに、前後相受け、未だ夫婦の道こそあけれ、其の克く和合國土經營に盡瘁せられしこと、誠に一體と云ふべく、我國夫婦和合の大本は、既に己に其の源を此の遠き神代に發せしことを悟るべし。

斯て宇比地邇神より淤母陀流神に至る迄の御功績は、先づ人と成るべき者の、母の胎内に宿りしより八ヶ月頃に及びしと同じく、未だ身體具備して此の世に出ると迄には及ばざると、專ら、同じ心

の大神、夫婦
誘ひて、遂に
成さんと互に
之にして、伊
は那と通音な
。次に岐と美
女神とを別ち
は、遂に國土形
八洲國のみな

樹ツルコト深厚ナリ我ガ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我ガ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス云々と、宣はせ給ひし大御心も亦爰に在り。世の大方婦女子、徒に末葉に走るを止め、克く大本の在る所に注目せば、知能を啓發し德器を成就するに近からん乎。一言以て告ぐること斯の如し。

禧謹述
國家の神聖
の、皇孫を、
天壤無窮の



るべし。治は知るなり。知るとは、有形の物體を處分する意にあらずして、無形の事態を認識する義なり。認識は、處分の元なり。認識して而る後處分の意生ず。國を知るとは、即、天下萬衆の心意の善惡苦樂を識別し、之を教へ、之を導きて、其の道を得しめんとするをいふなり。其の言意の、專、精神を主とするを見るべし。故に、書紀に、大物主神の詔を掲げて曰はく、大初之時、天照大神、悉治㆓天原㆒、皇御孫尊、治㆓葦原中國之八十魂神㆒と云へり。治㆓天原㆒

の大詔を下し
ぬるに、この
させ給へるな
焉の義、其の
にわるを知るべ
は、末なり。
とを得ずして、
くる所以なりと
の修養、宜し

體罰を主とせず、祓除の式を行ひ、神明を誓ひ、祓物を出さしめて、以て、其の心意の邪惡を洗滌す。素盞嗚尊は、祓除を科せられて、其の本性に復り給ひ、吾が心清々しと宣へり。以て、其の義を悟るべし。崇神天皇の、四道將軍を分遣し給ひしは、元、敎化を普くし給はんとなり。故に詔して敎に從はざるものは、兵を擧げて、之を討てと宣へり。見るべし。政の、敎化を主とせられしを。其の他、類例、擧ぐるに遑あら

物、漸復雑りしかども、く、歴世の國家統治の大和ふと共に、神を愛發せ此の如し。故取て、違ふも祭り給ひて、れと願はせ

敬の誠を致し、下は、民安かれと祈らせ給ひ、御躬、教化の本とならせ給ひて、此の聖諭を申ね給ひ、宗の遺訓を明徴にして、臣民と、其の德を一にせんと宣へり。吾等臣民たるものは、只、聖意、これ奉じて、毫末も違背することなく、只管、御世の長久を祈り奉りて、皇運扶翼の實を擧ぐることを得ば、たゞに陛下の忠良の臣民たるのみならず、祖先に對する孝道も、之より、大なるはなかるべきなり。

ひ出さず、何よ
しけるを、か
かあらず、その
め、何事につけ
中々に、親の
まづはり、今日
花さきたりと
背にうち負はり
少しも、うるさ

茶を乞ふことあれば、夫をもまた、うちさそひて茶をすゝり、憂世の憂をも知らぬげに樂み興じけり。夜寒の臥床は、まづ、みづから臥してあたゝめ、あまりに寒き夜は、そひねをし、若、衣服ぬらすことあれば、わが衣服とかへて、ぬれたるかたにわが身はいねて、一夜をあかすこともめづらしからず。かゝればまた、夏のさつきをりも、心を用ゐることおろそかならむや。すべて、みどり子を養ふごとくにして、九十餘歳の長命を



、めづらしき言ふもさらながく、世のか

家政



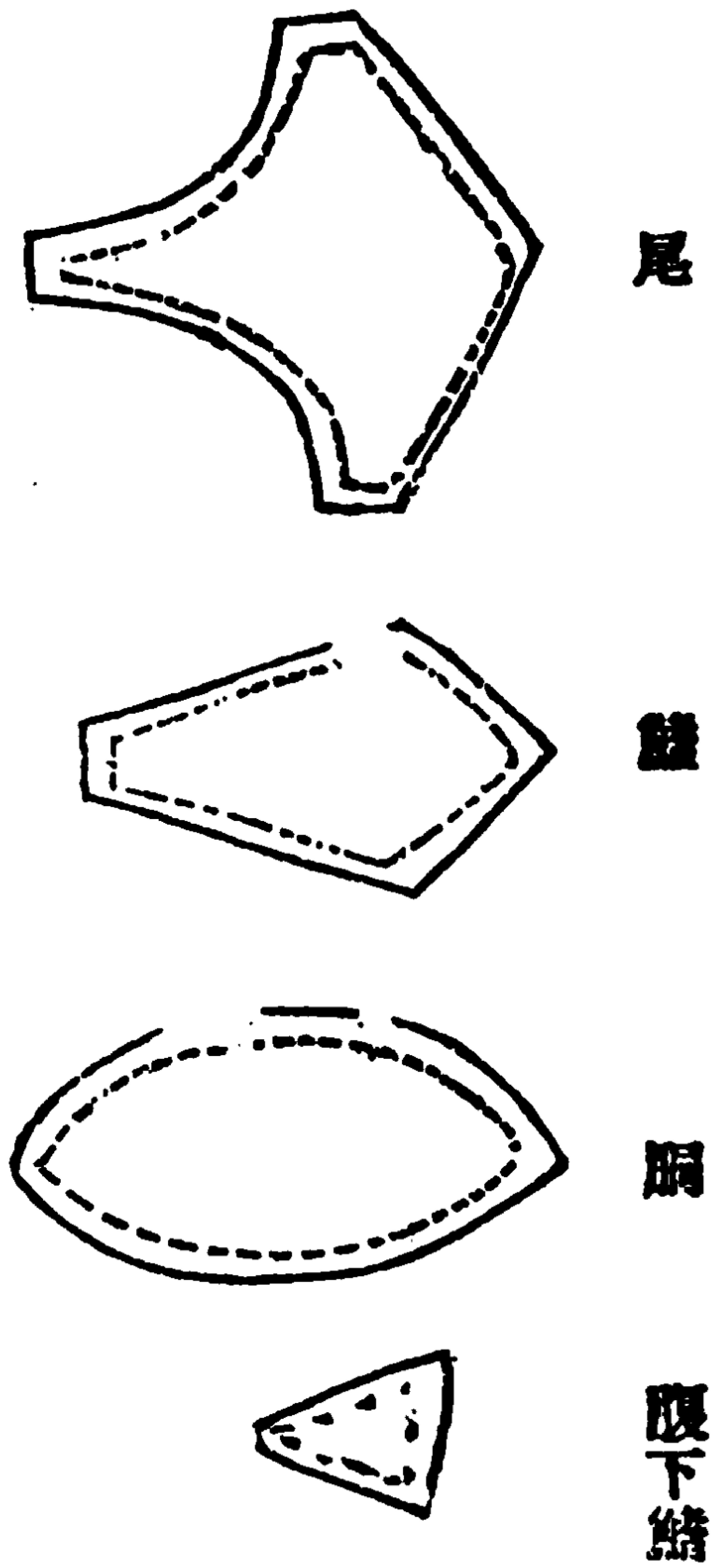
茶の湯

茶禮初學

孤峰菴碌仙齋不美

啻平素一椀のとは最熱心且諸大家の説をして一日もを貫く事不レ能註釋をも見直せしは讀者の學の終局を告續次號以下に

飾金魚



右圖の如く、紙にて形を取り、此の形紙を當て鰭を取るに、表緋縮緬一枚と、裏白縮緬一枚を取

縮緬一枚づゝ

縮緬一枚づゝ、
中、點線の所
に、圖の如く、
を縫ひ、腮の
く狹み、糊に
時に、眞中を
り、綿を入れ、
なり。
、輪になりた

だいどころ

鳥いろ〳〵

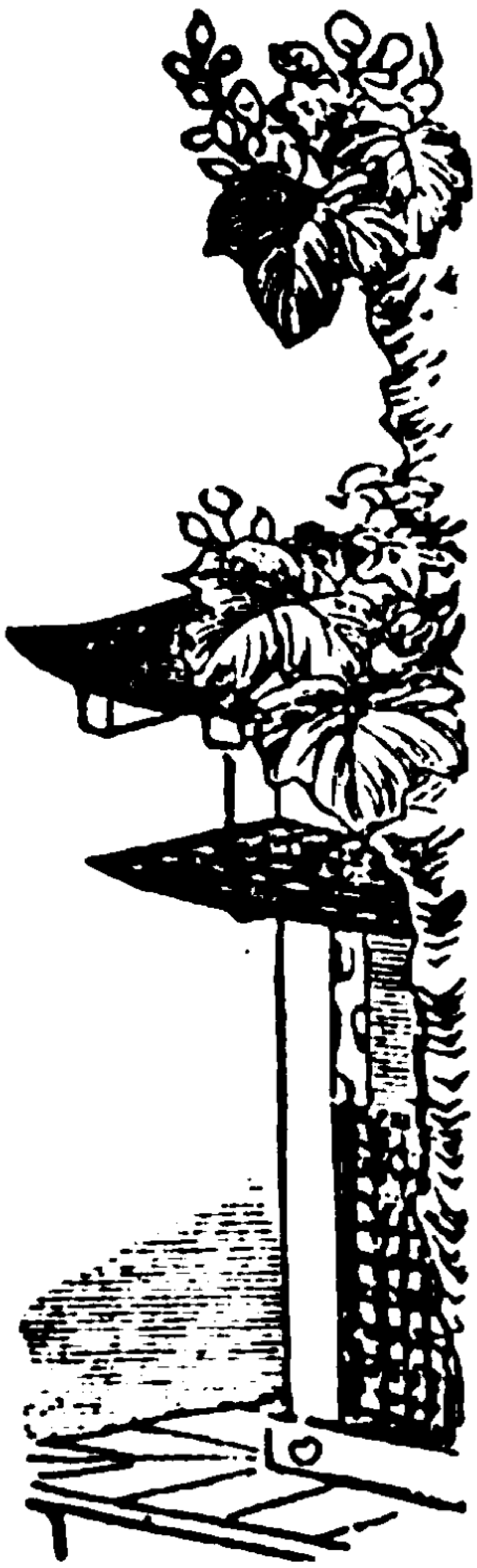
鴫か、けんじ鳩か、大鶉か、鴨か、(是は春の初さかな、右、此の内の鳥何にても、鴨の料理のごとくにして、右はねをよくとり、身の方へ、溫飩の粉をふりかけ、玉子の白味をすこしねり、身のなき方へ、外の鳥の身を入れ、同じくうどんの粉をふりかけ、其の上へいかにも、鯛のうす身にても、右の鳥の身どり、内塲て合せ、右の鳥の方よ

、少しからめ
出がき牛蒡か、
に用ゆ。

醤油にて加減
すべし。右の
椒いれて出す

定家煮

鴨の料理、骨ともに切て、加味は、前の鹿煮の如く
すべし。



ま、八月上旬より二十日ごろまでのことに

頼文

日、あからさ
まなど見たま

は、八月上旬より二十日ごろまでのことにて、また一段あり。

○はりまのかみ　播磨守あり。一本の傍註には、藤原有國とし、頼從本の傍註にも、又一本の傍書にも、行成と註せり。行成は、右大臣、藤原（九條と號す）師輔公の長男、攝政、太政大臣、伊尹公の孫、父は、一條少將義孝、母は、保光卿女、萬壽四年十二月四日薨ず。年六十八。能書にして、三跡の一人と稱せられき。

○このまけわざ　碁の負わざとは、碁にうちま

て、は　碁盤

海邊の景色を

ものにて、今の

しら〻の濱

鉛山と、瀬戸

の眞砂子を遠方

ゆる故に、里人

臺の華足など、リツパにてシサイラシクして

海邊の景色など、おもしろく作りたる洲濱の所に、水の流る〻狀を造りてある、その水に、下の如き歌をかきませてありたり。

その歌は、

紀伊の國のしら〻の濱で拾ふといふ。この石（この石に碁の石をかけたり）こそは、タクサンナ石の中にも、つきせぬ、この君が大御代と〻もに生長し、かの古今集に、

さゞれ石の

斷面に少しく傾ければ、花心の內部を見ることを

さゞれ石の
に大いなる岩
たいこの石な
ー
こ

彩峨

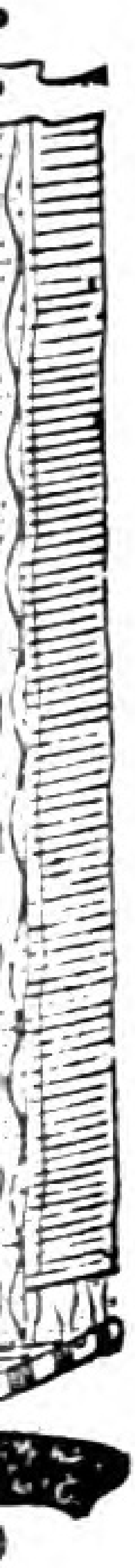
もの故、最も
左の圖は、
んしよ　べん

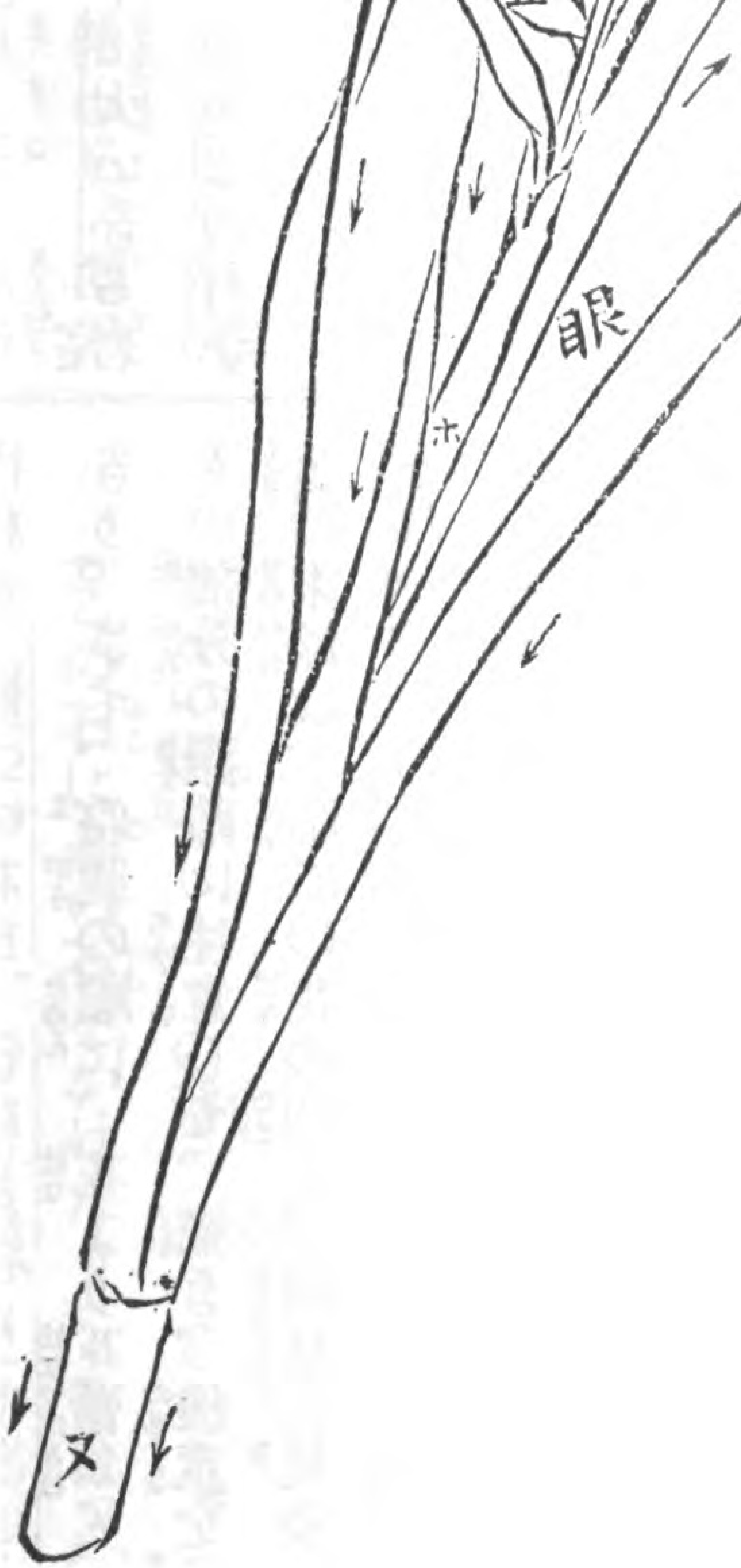
前面に少しく傾ければ、花心の内部を見ることを得れど、第二の花は、己に、内部は、見えざるものなり。さて、符號の順に、花より花蕾葉と、漸次、その部分の距離に注意して、描き、後莖を畫く。莖の末端は、第二の花の如く、圓狀に見ゆるものなれど、その切口は、切樣によりて、種々に見ゆることなり。

墨にて畫くには、花は淡墨にて畫き、葉は稍濃き墨にて描く。尤も、葉は、筆に淡墨を含め、狹量となして、畫くもよし。

又、水彩畫にて畫くには、花心は淡墨、花瓣並に葉

を使用すべし。





使用すべし。
の蕋の莖に附
葉は、極めて
又、時とし
莖の末端は、
あり。

一



女訓綾廼雛形

揖取素彦

一床に繪を掛くる樣、三幅對二幅對一幅對物にても、違ひ棚に、軸盆樣のものに載せてあらば、盆共に持出べし。自然、勝手より持參らば、箱のま丶掛出すべし。盆にすゑたるをば、其のまま兩手

き見るべし。
品、おほよそ
け、緒を矢筈
を受けて、静
と、(又はかべに
し、もし、ひ
みを直すべし。
へさせて、凡

掛け繪のはゞひろきにあへば、左右へ間をひろげ、また巾せまき時は、間をばせまくするためなり。故に、たゞ今掛んとする繪の廣させまさを測り、矢はずの先にて、此くぎを程よく定むべきなり。二ふく對、一幅も准じて知るべし。掛け終へて、よく〳〵位地のひづみありなしを見て、扱、のせたる盆を持ち退くべし。もし、盆の品賞翫の趣ある品ならば、空盆を、もとのごとくかざりてもよし。箱より取出てゞかけたるときには、箱のふた

に掛返るべし。

ツを前にするなり。これは、客の方へ足一ツ向く

…返るへし。
…がるべし。
…あり、又箱
…き、掛竿を
此のとき、
…ばかり上ま
はづすべし。
…きへおき、
し。紐とめ様、
とめ畢りて、
…ば、元入り

ッを前にするなり。これは、客の方へ足一ッ向く故なり。此の置方を定にして、上のかたへ、足二ッ向るものと思ひあやまりたるなり。今は、皆足二ッある方を客に向けて居るもの多し。誤なり。但し、香の家には、古法の通り、香爐の足一ッを客へ向くる様に覺えり。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長に、資って我が短を補ふべし。他の短は、以て反省の料となすべし。

米國婦人は
にあらず。其の
るものなればな
歎、巴理等に
るが故に、一
にして氣味よ
。
國紳士等には、
。而して、米
爲に、英佛紳

と　第二篇の米國婦人中一人の嫁せざるも
のなきは、一家の和合は、慥に、此等の處女に由
つて、遂に保たるゝなり。但米國婦人の弊として
見るべきものは、牡鷄晨を司り、其の主人公の
誰なるやを疑ふほどの家なきにあらず。總して、
東洋人より視れば、米國婦人にお轉婆とか、嚊々
大明神とかの評は、免がれざるべし。

（其の二）米國婦人と教育

近時、歐米諸國に於ける女子教育は、著しく發達
し、英國のオックスホールド、ケンブリッヂ大學

逃のキユッチ
生たることを
も盛に女子教
米國は、獨り
の國柄とや云
に見ゆる所に
教員生徒、卒

悉く算し來らば、其の數や、實に非常なるべし。

米國全體に付て之を言へば、東部諸州は、西部に比すれば、其の敎育の程度、學校の設備等、大に進歩せり。然るに、之を西部なるカリホルニヤ州の一州立大學に視るに、其の生徒の十分の四は女にして、又スタンフオルド大學の如きは、男生徒の數は、女子よりも少しと云ふ。

從來、米國にても、女子は、哲學、法律、數學其の他高尚幽邃の科學を修むるには、的當ならずとするの傾向ありしが、近時、敎育の進歩と共に、

る。
もの、多くは、
獨立生活をなさ
師、牧師等に從
奇風は、此等
公立學校より
る。又、富豪の
教を受くるも

實地以外に於て、其の歴史、効力等の講義あるものあり。

左に、米國西部の女子大學と、高等女學校の學課程度を摘出し、他の一斑を窺はむと欲す。

バチエラー候補科

聖書、美學、戯曲、心理學、倫理學、經濟學、神學、生物學、地質學、植物學、代數、三角、幾何希臘語、羅甸語、文學史、史學、修辭學、佛獨語の内一、等　修學期は、概して、四ケ年、一週授

には、纔に
に、之より
の學課程度
化學、物理
學年限は四
とす。學生
等を學ばん
、學ぶを常

るもの、授業料等にして、餘は、小使及交際の如き雜費なり。

何れの學校も、大概寄宿舍あり。一人毎に、一屋或は兩室を給す。兩屋のものは、一を寢屋とし、一を讀書室とす。他は之を兼ぬるなり。而して、寄宿取締上、其の最も嚴重なるものは、殆んど、家族的同樣の教育をなし、教師共宿して之を督勵し、妄に、男子に會見するを許さず。外出の際は、教師之を引卒し、然らざるものは、外出許さゞるなり。

、深閨を守る
男子と均しく
人の勢力を認め
紙上に於て、「驚
意の下に論せし
の一班を摘錄せ
師となるの自由あ

めとして、其の後女子の新發明の榮冠を戴くもの續々として輩出し、特許局の名簿は、殆んど女子に依りて其大半を占められ、輓近二十五年間に於て、女子にして特許を得たるもの殆んど四千有餘、特許局官吏は、相顧みて男子の末路を嘆ずる異數の事實を見る程なり。

今を去る二十一年前、合衆國高等法院の法廷に、辯語を爲すの自由を、婦人に與ふるの議案、聯邦議會を通過してより、女狀師にして、此の特權を得たる者十有五人、今日に於ては、聯邦各州に於ては、婦人は裁判官に任ぜらるゝの自由を有す。

△官界に於ける勢力

官界に於ける婦人の勢力の發端は、南北内亂の當時のことにして、紙幣整理の爲め女子を傭用したるに根源す。今日に於ては、

られ、ワシントン
には高地位に立
事務に從事する
者も亦少からず。

車匠	一
屠殺人	一二九
御者	二三七
水先案内者	一
請負人	八三
鍛冶師	五九
雜貨人	二
掘石者	三〇
裁縫師	六八、一五五
石炭採掘者	二一九
旅館番頭	五、三一五

以上、摘錄する所を一讀せば、米國婦人に勢力が、隆々、中天の觀あるを知るに足らむ。下は實に最

なること明かなる
ものと略同じ。
十代將軍家治
外戚を記したる
せたり。
一卷
『抑此の佩の戒

し由見えて、その奥書やうのものにも、『姉のもとへ人のおくりし、女小學といへる文あり云々今年安永五のとし、出雲寺とかいへる文あきなふものゝ、持來りて見せぬ、いとあやしくて、よくよくみれば、誠にうたがひもなき、宮川主の、子を思ふ心の切なるより、つくり出たる事あきらけし云々』と、某氏の辨したるなり。これらによれば、此の書、宮川氏の作とするは正しかるべき。

巻
るものなり。
とを、女すべ
て、女の學文
ろこしのたゞ
ゞれる物語さ
のそび侍りぬ
やはらげ、こ
をしたひ、身
あらし云々』。

作なり。

女誡一巻　原書は、曹大家の作にして、女論語に同じ。

女四書藝文圖會　四巻

天保六年の刊行なり。繪は村田嘉言といふ人の筆なり。

この書題名の如く、假名の女四書に、所々繪を交て、その意を解説せるものなり。

女諸禮集（繪入）　七巻五册

萬治三年の刊行なり。奥書に『右女之躾方、于

篇分ちて五巻
記大成と題し
大成といへど
、一字の増減

し、後儒と山崎闇齋に學び、晩に京西に退居し、超然世界を絶つ。その交る所は、川井正直中村陽齋の如き、當時篤學の士なり。其の歿年を詳かにせず。

この書、和漢古今の詩歌文章を、かれこれと引き、女の教訓を、平易に面白くかゝれたるものなり。中村惕齋の姫鑑には及ばざるべきも、なほ當時の女訓書中有數のものなるべし。巻數は、一巻なれども、やゝ大冊のものなり。

人寄贈
女遺稿

に、今夜も、
をなし。はし
いそがれて、
暗の空を見た
のいろもさだ
の聲はるか

今朝のわかれよ何にたとへん

とて、ことさらに思しいりたるさまに、むせかへり給ふ。いと心くるしう、見すてがたけれど、又、暮にとこしらへおきて、庭におりたまひ、げにいみじの草の露や、いかにしてかは分けゆかんとて、さしあゆみいで給ふほど、門さしいりて、來る人のけはひしつるものか、いかにとためらひ給ふに、たゞ、こなたさまに來にくるなりけり。かくれんとし給ふほどもなく、ゆくりなうさしいでつるかほは、あるじのおきなあり。いとあさましう、あき

は、すこしも、
まことに、心つ
れば、君は、物
日比見なれし
う、身にふるは
れたり。こな
と、うちもころ
と、中將、おと
ちかゝると

ん。いとふびんなりや。いかにもして、殿にゐて
奉らん。御馬には、えたへさせ給はじ。御車ゐて
こなどいひて、見あつかふ。君は、むかひの人々
と思すに、いみじうたのもしく、すこし、いきい
でたる心地し、給へど、なほ、おそろしうて見め
ぐらし給へるに、ありつるあるじは、いつのまに
いにけるにか、見えず。所も、ことの外にかはれ
るやうにて、いかめしかりし殿も、臺も、ひとつ
なく、きら〳〵しかりし庭の砂のうへに、ふすと

なり。わが御
りしは、あと
みやれ、すゝ
今まで見給へ
身、何くれと、
きりなり。い
そろしかりし
た、しかあや
れも、心をま
かへらせおは

とには、うつし心ある、一人さふらはず。みな、ものにわたりてまどひ侍る。すべて京には、たかきいやしき、ありとある人々、君の御ことに、心さわがせ給はぬなく、おほやけなどにには、御さまの、世にめでたうありがたくものせさせたまへば、神もや、そらに愛で、ゐてかくし奉りし。さらずば、あめわかみこにやいざなはれたまひしとて、いみじうあたらしと思しなげかせ給ひ、御祈をさへせさせ給ひてなん。何 某ら、めぐりあひ奉らずば、世にいきたらし。ふたゝび京に歸らじと、

りと、いとをし
車、ゐで來た
ば、すなはち、
にのせまゐら
る。内の大殿
道まで御むか
、松柏おひし
ものすごき古

まふ。からうじて、京に入りたまひ、殿におはし
つきたり。おもなきやうなれば、内の大殿の君
たちにも對面したまはず。心地もたがひて、しば
しはなやみたまふ。内の大殿をはじめ、人々思し
さわぎて、御ずはう何くれの御祈、かずをつくし
てし給ふ。そのしるしにや、二三日はなき人のや
うにて臥したまひしかど、やがて、よのつねにな
り給ひ、さのみそこなはるゝこともなくて、さは
やき給ふ。やう〳〵、こゝろもしづまりて、つく

のさましうは
・もなし。道
ゐるこをとも
心よりはかに
まひ、左の大
へかはらで、
りつるわら山
木幡山のおく
なんと申す。
狐にやはか

ころ、稲荷の御社はとりはきわふき奉ればゐん。
かゐらず、身にをかしわらんとするを、すくはせ
たまはんとて、かゝる目をば見せたまへるにやわ
らん。まことにかりの色は、害ゐはわさきぞか
し。うつゝに、さることのわらんをり、いかゐる
つみにかはわたらんとする。身の後の名さへ、物
きよ。からし。狐のかれる色にだに、かくもまどふ
よむべしも、まことのいろの、家をうしゐひ身を
はろばさんずる、いとおそろしかゐり。今まで、
かゝることをだに、たどくしげにしつゝ、ふか

…くばくあらん
…べて
…いろ香に
…つゝましく、
…しかど、内に
…びく御つか
…あれば、いと
…ふべくもわら

茶話指月集

河東散人鵜巣

寄稿人　孤峯庵不羨

森口といふ所に、ひとりの侘人あり。利休居士としる人なりければ、いつぞ、茶をたてんと約す。ある冬のころ、大坂より京へのぼるに、かの侘人をこゝろざし、夜ふかに出で尋ぬれば、

居いとわび
もとに、人
灯に竹竿を
ろし、竿に
りぬ。休打
しよと、侘の
わんのでと
過ぎて、大
餅を引く。
のわりて、

註釋、不羨曰、森口といふ所は、大阪より京都へ昇るの途中なるべし。其の地方の地理に闇ければ、詳細の個所は、御預りにいたします。侘人と云ふことは、家産等十分に無レ之人をさして言ふ。茶人の符調にて、所レ謂清貧者を云ふなり。雖レ去、爰にては、利休居士も聽及尋見んと云ふ思想を起しけるは、尋常一樣平凡の茶人にはあらざるべし。誰人の弟子門人と云ふことゝ、又、名前は判然せざれ共、或は身分有る人にて、憚り出しにくゝ、包藏

も、大〻的に、何様の亭主を與ふるもの味噌に仕立てあらんかと或献の酒も又うせしに、酒半

らむかなれど、茶道の眞理敵より言ふ時は、物なければよし。鯰は鯰に任せ、有はあるに可レ任。柚味噌と蒲鉾とは、大に旨趣違ひ不レ取レ合なり。竹竿を以て柚を落したること、虚言僞となりて、興醒たるならん。休居士の腦髓力より是を見れば、亭主の茶道の貫目人物の可否をも見拔たるものならん。洵に、此

他人らしく、をもてなすべ茶の事のみに能考へて、其取遣をなすべ

を賑醒し、右手は遙に小高の山を望むべし。風光明媚といふ程にはあらねど、夏の夜など、空晴れたるに、いぶせき宿を立ち出で丶、扇うちならしつ丶、鰐石橋あたりに徜徉する時は、川風ひや丶

茶の事のみに能考へて、其取遣をなすべ
留者の物惜、も、此の所を、

園主人

たるに、いぶせき宿を立ち出でゝ、扇うちならしつゝ、鰐石橋わたりに徜徉する時は、川風ひやゝかに袖を拂ひて、いと心地よきに、姫山の頂より、圓なる月の匂ひ出でたるなどは、得も云はぬ眺なり。そも此の山の、優なる名負ひたる事のもとは、たしかなる記録に見えざれば、知るによしなけれども、古老の口碑には、くさ〴〵の事をぞ傳へたる。いとおぼつかなくて、信憑しがたき說ながら、大内氏未だ中國に威を振ひし頃、此の山に牙城ありしが、其の頃京都流浪の公卿が娘に、

今は此の
荊棘路を塞ぎ、
くのみ。
堂の、大梅山
そのかみ大内
相望みて、輪
迎藍にて、境

坊なめ
内政弘卿の墳墓あり、天文廿年八月廿八日の夜、
逆臣陶尾張守隆房、謀反の旗をひるがへし、其の
主大内大膳太夫義隆卿の住める、山口築山の屋形
に押しよせ來りぬ。墮落の沙門、流竄の公卿と呼
ばれたる、義隆卿は、時勢をも、父祖の遺業をも
うち忘れ、和歌連誹の道、遊技的の文學にのみ身
を窶して、武備の重きを忘れしかば、百姓町人に

房の逆意著し
入るといふ風聞
にも係はらず、
りしかば、何ぞ

後なる間道の、一筋道なる谷間を辿りて、吉敷峠
の險を越え、大津の深川に落ち行きしとかや。今
も法泉寺の奥なる谷間に千人斬と稱する處あり
て、冷泉判官

の[illegible]
るといふ風聞
も係はらず、
しかば、何ぞ
て、敵を喰ひ
泉判官等の忠
ふ説を採み消
。護して、法泉
ひあるに、兵
足らざりしと
山の屋形も、

の険を越え、大津の深川に落ち行きしとかや。今
も法泉寺の奥なる谷間に千人斬と稱する處あり
て、冷泉判官等が、必死に拒矢射ける處あり。な
ほそのあたりの藪の中には、墓石處々にありて、
五輪の塔など散亂し、石の玉垣あまたあれど、い
づれを誰とも知りがたし。此の處山懐なれども、
廣やかにて、民家散在し、現に處の名を法泉寺と
呼ぶ。木の葉ちり布く秋の頃、あるは櫻花咲く春
のをり〳〵、此處にあそび見ば、舊壘利刄の碎け
し所、萬巻讀經の聞えしあたり、無量の感慨を惹

はこれより身を
柴賣の孫兒なり
列り、剎へ千々
花を妻あはし、
るに彼の犬自物、
語らひ、舞々と
する事、言語同
らず、その罪は、

からじ、じがおな
その爹々さへ殺さ
そ我身の妬にて、男
口の物思ひ、死にて

の事に關して、實に尋常婦人のなし得べからざる、感慨を漏らしぬ。此の情と、此の行爲とは、恐くは、優に聖域に入ると稱しても不可なからんか。

園花は、又、父の怒の烈しきを、見るにつけ、聞くにつけて、妬しさ思ふ氣色はなし、只半七が往方おぼつかなく、いかなる樹の蔭草の舍の、簷下に立あかし給ひけむ、衣手うすき秋風に、またもや病着のおこりはせぬか、久しく病みておはせしさも知らざりければ、音づれもなほざりに過ぎたるを、心づきなしさこそ怨み給ひけめ、男子と生れたる甲斐には婢

にして甚だ妙なり。馬琴翁の筆をもて、之を評して曰く、

げに、榮枯得喪は、四時の代謝が如く、もえ出づる樹の花、

てさ、その爹々さへ殺さ
我身の姉にて、男
の物思ひ、死にて
の人の在されば、
ひも考へず、むじ
うせ侍らめ、人し
底は解けずさも、
これはまた、あは
りがさ、父を諫め
涙も中七を、げに
らぬに羞ぢて、や
ぞ、興踊もかく園

いし…甚大如き…居…候の筆…

て曰く、

げに、榮枯得喪は、四時の代謝が如く、もえ出づる術の花、欲るゝも先だつも、いづれか秋にあはざるべき、彭祖が命長かりしも、子孫には傳へがたく、石崇が富類なりしも、生涯を過ぐすに足らず、德なうして貴からんさ願へば危く、富みて驕るものは亡ぶさかや。禍福吉凶を、龜の卜部に問はんより、尾を泥中に曳くにはしかず。………

かくて、園花は遂に病にうち臥しぬ。もとより絶えぬ思の積りて、病となれるなれば、一朝にしていゆるに非ず。されば急に重くなるにはあらねど、さればとて快しといふ日は稀なり。風邪心痛

…立て鎌倉に
の驛に宿かりし
かくすれども癒
ゑりぬ。瀟鹽草
ひはたして、進
勝は、いとかひ
べうもあらず。
に、耻を棄て、、

れとおもはざら
…に抱かせかしつけ
せし。………

…妻の為とに不忠

さいはれ、不孝の子となりしより、年豊なれども日を算て食ひ、世は暖なれどもわが眼には春色なく、千辛萬苦にあふみぢなる、多賀に住みわびて出たるが、又や旅寢に病む雁の、妻子に憂を見するこそ、わが病着より苦しけれ、さるを三勝が信々しく、晝は終日看病し、夜は耻を忍び門に立ち、親子三人が玉の緒を、三すぢの糸に繋ぎとむる、その三味線の手のうちを、受くる扇は名も高き、難の太夫のなす事が、しげれ松山筑波山、降りて今の曲節も、こゝらの人には馬耳東風、

樂園



。……………
におもはゞざら
の山河悠々一
は遂に煩悶の
其の妻其の子
闌花等がわら
極めたる半七
壮の時機をま
（以下次號）



樂園

古今叢談

山岡螢雪

（十二）三月の異名

舊暦により、一年を四季に分てば、即ち、此の月は春の終りなりとて、春抄とも、季春とも云ふ。或書に、凡そ末月を季月といひ、又、字彙には、三春の終りあるが故に、之を季春と謂ふとあれば

千草の其處の心得顏に咲き迎へて、蝴蝶のからざるはなし。

ふ。

始故洗新也是月故而從新莫

さく三月の節、て、

此の月を、修禊令辰と云なりとあるより、禊月の異名は起り、又、或書には、竹秋とも見えけり。

曰竹秋三月也蘭秋七月也贊寧竹譜八月爲春二三月爲秋凡百穀皆以始生爲春成熟爲秋。

月令廣義には此の月を清明とも、穀雨とも云へり。

曰春分後十五日斗指乙爲清明三月節萬物至此皆潔齊而清明矣。

又曰穀雨三月中清明後十五日斗指辰爲穀雨

と詠ひ、其の他、谷を窓に、鶯が、嬌音を弄ぶ際あればとて、鶯時とは云ひ、又、蠶作る月との意にや、蠶月とも云へり。

實に、にぎはしきは、此の月にこそあれ、萬物悉

三月の節

、

りぬる

やぞ

れぬべし

ともあり、

さればとて 彌生とは云ひ 又 彌

にや、蠶月とも云へり。實に、にぎはしきは、此の月にてそあれ、萬物悉く生ひ茂りて、山川草木いさぎよく、清明浄潔なる、あはれ、天色自ら融々として、花笑ひ、鳥啼き風和ぎて、徒に草蘆に蟄するを、許さゞるも宜なるかな。

（十二）　松虫の長壽

松永彈正久秀、かつて、松虫を飼ひ、さまぐ\に工夫をこらして、養ひければ、三年迄生きたりきとぞ或書に見えけり。あはれ、年限りに死すべき

しく〜きとぞ。

ぶは、彼の名に
十字の詩なれど
一休禪師が、或
、十四文字にて
木口近レ天ニ

、懇意を厚くし
、食料を送れ。
、商人の鑑を爲

と、曰く、

一、先づ朝は、召使の者より早く起きよ。

一、十兩の客より、百文の客を大切にせよ。

一、買物が氣に入らず、返しに來たら、賣る時より丁寧にせよ。

一、繁昌するに從つて、益々儉約せよ。

一、小使は、一文よりしるせ。

一、開業の時を、忘るな。

は、常に多からざりき。其の頃、又、父に請ひて手頃なる、吹矢筒を得たりしかば、間がな隙がな、木の下に立ちて、小鳥を狙ひ吹きけり、左れど、

料を送れ。商人の鑑を為なるのみなら、得る所尠か

記(承前)

庵 主人

手頃なる、吹矢筒を得たりしかば、間がな隙がな、木の下に立ちて、小鳥を狙ひ吹きけり、左れど、こもなど左は、安々と獲らる可き、長き冬の間、終に、一羽も獲で過ぎんとせしに、或る夕暮の事なりき、醤油藏の前に立てる、梨の木に、三四羽の雀を認めたり。塒の鳥は、獵夫も取らずと、豫て、母の物語りに、聞きたれど、眼前、矢頃にある獲物の、いかで、此のいたづらなる、小獵夫に忍ばる可き、ツト走歸りて、筒を携へ、足音を掠め、息をしのび、靜に窺ひよれば、雀は、猶は

かある、頻に
れ七歳なりき。
昨日、戰爭の話
頃より、町の小
初の遊にも、篠

民に、劃裁せらるゝに至りぬ、此の遊戯、我が十
三歳の頃迄續き、折節は、巡査の説諭に、解散せ
しこともありき。我れは、年少なりしにも、係ら
ず、門地と、其の謀畧に、富めりと云ふをもて、
夙に、地歩を占めたるが、同じ頃、西新町に、北
條鈔次郎と云ふがあり、我れには、只だ一つの、
年長なりき。同町の、牛耳を採りしが、後來、長く

高等商業學校を
米國航路の金州
に覇を稱する頃
謀わりしが、突
、温厚なる西村

一田舎なれども　金州の英語家の高田を　目のし
にた
「來よと云ふたとて　行かりよか　佐渡へ　佐渡
は四十五里　浪の上
「花の今町出てくる時は　雨もふらぬに袖しぼ

翔を稱する頃
わりしが、突
温厚なる西村
。
一

頼　文

しが、取調べ
るものなるが、
[illegible]

「來いと云ふたとて　行かりようかな　佐渡へ　佐渡
は四十五里　浪の上
「花の今町出てくる時は　雨もふらぬに袖しぼ
る下越後なまりうた
「をこいすよ　はつねぶんだせ　きくがんだそん
ま　なかぬと　ふねりころすぞ
「これこゝさ　ばかけに　でかひ　木がはえた
おれもみるべい　おまへ見つさへ
「ゐちでは　梅かふらくに　上野は咲た　こと
んし　たはこりの　木の花
酒の元をするをりの歌
「この[illegible]へ　出る聲かしぞ　聲と取られて

切り緒のわら
しゆあらく
子どもに聞ば
松が御座る
指して呉れ
せば 竿はみ
の 云ふ事聞

沉砂惡田の渡し
ごくに やらす

きらぬ瀬と
「うき名を流す 鳥さへも 壹羽やごめで すて
しくと 別れの つらさに袖しぼる
「ゆふべ 夢見た 何んと見た 白毛の 鼠は黄
金の 大持 引と見た

茶摘歌

「遠州濱松 能茶の出所 娘やりたや 茶をつみ



文林

惡田の渡し

ゝに　やらす

くさ

文林



霞める空を鴈歸る　東久世通禧

鳴きつれてゆく鴈かねの聲すなり
かすめるそらに影はみえねと

原外霞　久我建通

初わらひいさをりてこん草のはら
ひとのこゝろをひくかすみ哉

落梅風　鍋島直大

梅の花またさかりにはみえねとも

正臣

るなり

原巌雄

んとす

崎勝従

池道子

かげかな

わか雪の消えにし日よりむら〳〵と
垣のわかくさもえそめにけり

春夜雨　西四辻茂子

ぬは玉の夜深きあめもおとなくて
春のねむりにさはらさりけり

野春風　伽原愛子

はしたかのすゝな咲野の春かせに



雑歌

げかあ谷章子

りかあ下健子

かり皃川直子

雜報



●仁孝天皇御例祭　御當日、御殿の裝飾を爲し、九時三十分、式部職員著床の上、奏樂中に、同皇靈殿開扉、神饌を供し、掌典長祝詞を奏し、同十時より、天皇陛下御代拜は、岩倉掌典長、皇后陛下御代拜は、小池權掌侍、皇太子殿下御代拜は、高辻東宮侍從長、同妃殿下御代拜は、吉見東宮女官、何れも奉仕し、次に、小松宮依仁親

心を動かし、
る、若干の内よ
同社に寄附した
、母の懐を苦しめ
顔する、少女
阿彌陀村、字魚

ても、又、左の如く、賞狀を贈りたりと。

平素能く、父母に事へ、弟妹を撫し、其の孝行、兒女の龜鑑たるに足る。依て、明治節用大全、一部を贈與し、其の善行を賞す。

明治三十四年二月二十三日

私立印南郡教育會長

正七位勳六等　八木虔介

五十九番地に住
阪町に住して、
る者なるが、近
吉も眼病にて、
云ふ、十三歳な

迭應答、亡吾買一醉欲成眠、如泣如訴夢耶眞、忽推
寢衾忖相見、街頭掀髯兒與親、老父爲我慇懃說、
齡垂六十目失神、唯餘少小一少女、齡纔十三甘苦
辛、行商日夜無間斷、數年宿疾奈赤貧、宿疾赤貧
兩難瞞、爲父爲子三世因、三世逆因倘未了、生死

者なるが、近
も眼病にて、
ふ、十三歳な
孝心至つて深
き、夜は深更
かの利益を得
馬町に住する、
、四谷區民を

片淵

街○時有行商

齢垂六十目失神、唯餘少小一少女、齢纔十三甘苦辛、行商日夜無間斷、數年宿疾忽赤貧、宿疾赤貧兩難醫、爲父爲子三世因、三世逆因尚未了、生死輪廻幾沈淪』朔風凛兮捲地急、父子低頭暫停立、手足凍皴皮肉死、可憐萬感衝胸集、』嗚呼吾亦鎭西一寒士、少小出家志未伸、落泊帝都十餘歳、家無機嗣德無隣、今聞此語長大息、不勝紅淚灑衣巾、

●小學生徒の篤志　櫻田學校高等三年生、芝烏森町一番地、澤本周馬(十四)は、平生、兩親其の他より、貰ひたる小遣錢中より、一錢二錢宛、土製貯蓄銀貨入に、投げ込み置きたるを、今回、月嶋丸

ス、ガビネス」と到着したりと。

此の新しく、且聞くに、先代忠より、特殊の寵人民一般の尊敬

より、適當の家庭女教師を傭聘し、十四歳なる忠重公を始め、弟妹諸公子と同居せしめ、語學は勿論、家庭の教育より、日常の衛生に至るまで、最も、進歩せる、文明的の方法に則りて、掌らしめては、如何との相談となり、島津忠濟公に、考慮を求めたるに、同公も、時勢の必要を認めて、直ちに、同意し、又、後見人たる、島津珍彦男も、

見人により、駐を受け、同氏は、息の、英國代理しに、同夫妻のオルドを、英國

公を始め、公爵家の當の…に、賛すべきことにして、舊慣を重んずること、頗る堅しと、想像されたる公爵家に、此の擧あるは、世人の、或は訝かる所あるべきも、島津家は、由來、文明を奬勵するの歴史

の、英國代理
に、同夫妻の
ルドを、英國
ミス、ハーウ
現皇帝の皇
庭教育を擔任
らず、又、英
育したること
、教育したる
孰れも、同孃

公爵家に、此の擧あるは、世人の、或は訝かる所あるべきも、島津家は、由來、文明を奬勵するの歷史に富み、先々代たる、齊彬公の如きは、元治年間に於て、早くも、歐洲文明を輸入し、或は、兵制を改革し、或は、工業を創立して、富强を計り、以て、久光公忠義公が、一藩を率ゐて、維新の際に、偉勳を立つる、基礎を定めたる程あれば、今回、公爵家に於て、英國より適當の家庭教師を傭聘し、忠重公及び、諸公子の爲めに、純潔ある文明的教育を掌らしむるに至りたるは、齊彬公以來

若宮町卅一番
明治二十二年、
寄附によりて、
年の者にして、
期を終り、他
感化し、一定
授産場とも謂

他に出でるもの多く、仕事場に在りて、職業に従
事するもの少なし。其の毎日得る所の賃錢の內、
一割五分は小使として本人に渡し、二割は貯金と
して、銀行に預け、他は、會費として納めしむる
あり。創立以來の、經過を案ずるに、至極好成績
にして、何れも、相當の職を得、今後社會に出づ
るも、差支えなきまでに至れりと云ふ。初め、此

家に放蕩して、
根橋下等に群集
狩り集めて、收
餘る少年共、多
、好成績を現は

わが國音の動詞、形容詞、助動詞、副詞、感嘆
詞、後置詞等、(ロ)固有名詞、(ハ)普通の外
國語、本邦語にて、通常使用し居る各種の名
詞、(ホ)其の他、等にして、此のうちには、總
ての名詞及び、

り集めて、收
る少年共、多
好成績を現は
若し、今後、
感化院の如く、
の居室を分ち、
るあらば、社
り。
校令改正の結
ありしが、帝

國語、本邦語にて、通常使用し居る各種の名詞、(ホ)其の他、等にして、此のうちには、總ての名詞及び、ハヤリ(流行)等の言葉をも含む、

二、字畫が多くて、かくに手間どれ、覺ゆるにむづかしい漢字を用いぬこと、

三、字畫が、少なくとも、間違ひ易い漢字は用いぬこと、

四、假名でかくよりは、便利な漢字は、用いること、

て、我陸軍中
ンスト、エル
とし、此の程來
保田鼎氏等は、
協會々頭、佐
所屬の畫伯に、
以て、蒐集し、

新刊

少年世界（第七卷四號）東京 博文館

令徳（第十號）東京 令徳會本部

女學の技折（第十五號）東京 女子講習會

文庫（第七卷第一號）東京 內外出版協會



くるへかはあるはるのよのつき

（以下原稿到着順）

はるされは月もかすみのころもきて
はなにきそはんこゝろなるへし
竹村貞子

うすきぬにつゝめる玉さみゆるかな
高安やす子

川つる子

つきかな

脇米子

はるされは月もかすみのころもきて
はなにきそはんこゝろなるへし　竹村貞子

うすきぬにつゝめる玉とみゆるかな
おほろにゝほふはるのよのつき　高安やす子

ゆきあれごのやまのそらをみわたせは
かすみたなひくはるのよのつき　仁平俊子

さほ姫のかすみのそてのひまもれて
ほのかにゝほふつきのかけかな　伊豫田ふく子

ひかりをは花にゆつりてはるやまの
つきはおほろにかすむなりけり　高山かすい子

わか庭のさくらのはなのその間より
かすみてみゆるはるの夜のつき　小杉みや子

梅か香のゝさかにかよふまさの戸に
つきもかすみてにほひいてたる　八尾いゑ子

梅のはなにほひふかめてはるのよの
つきこそひかりかすまさりけれ　佐々小學子

つき
南保子
な
中山登美子
りる
石川類子
つき
石川樂子
すれ
福原菫子
かな
關勝子

にきはひし隅田のわたりもくれぬれは
月かけのみそすみにけるかな　瑞井滋久子

大かたのそらはかすみのたなひきて
おほるにみゆるはるのよのつき　椎野秀子

春のよのおほるもつきのならひかな
かすみのそこにかけはいさよふ　椎野清子

やまの端をほのかにみせてかすむよの
つきこそはるのけしきなるらめ　椎野薫子

なかなかにのさけかりけり山の端の
かすみを分けてにほふつきかけ　松尾せい子

夕されはいまはさゝけるはなになほ
のさけさそゆるはるのよのつき　瀬戸ゑい子

坂倉峯子
けき
中川芳尾子
ゝひす
山田よね子
ゐかな
山田稲子
りつき

おほるおほるにいつるつきかな
ひさかたの月のゆくゑもまさふまて
かすみはてたるはるのよのそら　永井さい子

掉さしてかすみのおくをゆくふれの
かけさへ見ゆるはるの夜のつき　青木たま子

さく花にこゝろひかれてはからすも
やなきにかゝるつきはわてけり　田村道子

川芳尾子
山田よれ子
山田稲子
里眞子
田徳子
田絹子
井もさの子
畑君子
豚子

かすみはてたるはるのよのそら

棹さしてかすみのおくにゆくふねの
かけさへ見ゆるはるの夜のつき　青木たま子

さく花にこゝろひかれてはからすも
やなぎにかゝるつきはめてけり　田村道子

さき出し花にひかりはゆつりおきて
おほろににほふはるの夜のつき　田村米子

さきにほふはなの木の間をいてたれさ
なほおほろなり春のよのつき　高名登代子

咲きつゝく梅の葉ごしにてらすなり
ひかりのごけきはるの夜のつき　加藤よしの子

はるのよはねやのひまこそ嬉しけれ
うめが香ながらつきもゝりきて　森田さも子

きのふまでほころさみねしおほ空の
つきのみふれもかすみわたれり　服部鴬子

月のせのつきのひかりはいかならむ
よなよなかすむはるのそらかな　服部正子

かぜかすむおぼろ月よのかけふみて　河合縫子

かな　月　けん　つき　れ　き　つき

山田きた子
友近里子
有村つる子
堀内まさ子
倉田まつ子
松山かずゑ子
畠口こかく子
玉名かな子
飯塚まつ子
常間みすの子

ほのかなる梅が香さめておほろなる
　はるのつきをもながめけるかな　赤尾かつ子

春の夜はおほろにかすむつきかげを
　のきはのうめのうへに見るかな　赤林しげ子

花の香にまよへたりけんはるのつき
　ひかりかすみてかげおほろなり　飯泉秀子

ゆきかよふ舟もなみまにあさたゑて
　みながみかすむはるの夜のつき　岩田よね子

わが庭に咲けるさくらのはなの上に
　かげほのかなるはるの夜のつき　今井たい子

訪ふひさもいまはあらしの音たゑて
　こずゑにやさるはるのよのつき　國府田春子

けり。日麗かに、風暖く、春の心を歌ひ出でたる鶯の音も、いよいよ清げに朗かなり。山は、遠く薄墨を走せ、近く翠を畳み、ところどころに、山櫻の匂ひ出たる優しさ、なにかはたとへむ。野は、飛火の跡とめて、萌え代りたる若草の、見渡す限りみどりにて、翼經ずある胡蝶の、

塚まつ子

間みすの子

武てる子

島みき子

加藤まさ子

天野みち子

中村いそ子

壘を走せ、近く翠を疊み、ところ〴〵に、山櫻の匂ひ出たる優しさ、なにかはたとへむ。野は、飛火の跡とめて、萌え代りたる若草の、見渡す限りみどりにて、翼輕げなる胡蝶の、徃き來ふ人の笠に戯るゝなど、おのづからなる一幅の畵なりけり。あはれ、當てなしに出ても面白きは、春の野山なれや。さても、思を勞せぬ歌人。筆を惱さぬ騒人はなかるらん。この野邊に、この山邊に。春の野山に、野山の春に。

地

大阪市北區中ノ島六丁目一番屋敷
松尾せい子

春の雪の降るとおもへば消えはてゝ、野も山も、ひとつ緑に、若草萌ゆる頃となりぬ。朝日に匂ふ櫻花は、敷島の大和男子のいさぎよき心とたゝへられ、うすくこく、八重に一重に、咲けるもうれし。春風のくしけづる玉柳は、左保姫のうちたれ

づる音、いつ
すみこめたる
きかぎりなり。
日にはひわたり
くぞなりぬる。
てのをりは、ま
しと、散りは
たさで、しば
、例のはかな

なん。「野火焼不盡、春風吹又生」、といひけん野邊の若草の、長閑に萌え立ちて、菫の床のねよけなるを、心も空に雲雀の思ひ立ちたる。長閑にそよぎて、乙女の裳裾、或は柳の糸に風の戯れたる。さては賤の男が捨てゝ休らふ鍬の柄に、吾も暫しと、蝶の夢圓かに打眠りたる。いづれ優になかしからぬかは。さても一年の長閑さを取り集めたるは、春の野山にこそ。あはれ／＼言の葉の匂ひは薄々ことも、かゝる景色を只にやはさて、かく書いつけたれど、心浮き立ちての筆のすさび、外目にはさこそ拙なからめ。よしや、拙びに漏れぬことも、そは常なれば、心はやがて春の野山の、長閑けう將た平かになん。

四の時その折々につけて、野山のけしきの、あはれはつきせざれ

眞鍋直子

れはそめてより、日
その山のさはく見
に、まして、待々
に打かすめるを見て
辿う立出れば、見わ
百千鳥のこゑの、手
りかにさび行くなど

はなくるまゝむごと咲き始めたる、花よりも艶らしゝさはなくるま
は、其の名の雅にして、可憐なるものから、探らんせしに、仁者の
所爲に非ずとぞ聞さる。從兄の申さるゝやう、都入の二なく賞す
る、隅田川長堤十里の花の雲、美は眞に美なれども、熱閙と俗氣
さに、殆ど幽雅を害せらる。世界廣しと雖も、恐らくは、故山の
春色に、如くもの無からん歟。さ、げに原野廣けれど、人跡の行
きかひたねて

まして　行々
かすめるを見て
立出れば、見わ
千鳥のこゑの、手
にさび行くなど
ぬ。少女子の、あ
なたや追ふらん。
ども、ゆかしさも

〃　保　子

其のけしきいは
ろ〲、春めきた
日と共に、かは
に、雪解の水の
り、常盤木の千
今一しほのなが
もはてぬ月の光
の中ののどけさ

所謂に非ずこそ謂ふべ　彼の時まなりや　都人のこたへ賞す
る、隅田川長堤十里の花の雲、美は眞に美なれども、熱鬧と俗氣とに、殆ど幽雅を害せらる。世界廣しと雖も、恐らくは、故山の春色に、如くもの無からん歟。と、げに原野曠けれど、人馬の行きかひたゆて無く、百千鳥の囀る音と、我らの聲のみ。閑靜極まり、風音幽邃にして、誠に天女の樂かとぞ覺ゆる。霞こめたる、遠の山寺の、仄めくも奥床し。さりながら、無常の鐘こそ厭はしけれ。願はくば、此の春を千歳につたへまし、と互に惜むも可笑。これより下つ方、五六町なる、白龍山（日本武尊を祀れる村社）まで、あくがれんとて、帯の如き、田の畔道をつたはる。田の面、空しからずして、れんげさう、きつれのぼたん、など、おかしげに咲きたる、春を樂むめり。お山は、山高く水清しの勝にして、本郡一ときこゆ。巌には、こもちしだ、きつからはぐま、みつでうらぼし、かしわばはぐま、いがりさうなどの植物、おぼつかなく生ひたる。瀧つ瀬の音のまさりけるは、貫之大人の「袖ひちてむすびし水のこぼれるを春たつけふのかぜやさくらん」と想ひ出づるは、少しをりふしをあやまりしか。磴道の兩がはに櫻の清らに、咲きいでたる、躑らよりも、一入床し。はや入相もほどすぎしか、名殘はいまだ

月の映じたるを見

岡本みち子

にあれど、山里こそ
里にそふ、山里に
のころも身にまさ
を含み、香りはな
にて、心よく秋を
中々に、あはれ深
にかすむ春の色、風
、みどりの神の青
の花、秋ゆかしく

ほの〳〵とあけゆくまゝに、やがて障子推し開き立ちいでゝながむはるに、空は一點の曇りもなく、澄み渡り、心地いとすがしく心も自と勇み立ちて、朝げもそこ〳〵にすまして、志す方へと出で立ちたり。そよ〳〵と吹きくるかぜは、心地よく、千草に於ける白露は、朝日に光をきそひつゝ、千代千代と、歌ふ雲雀の聲ゆかしく、緑をなせる麥畠は、青海原ともうたがはれ、咲きみだれたる菜の花は、黄金の錦布きたらんかともあやしまる。其の中をおもしろうぬひありく。清き一筋のながれ、岸に伏したる糸柳の風になびきて、塵を拂へる樣など、得もいはれぬながめに、しばしのほどは、吾を忘れてたゝずむに、折から何處とも知らず、床しき香の風のまに〳〵、送られて、鼻をつんざきければ、香を尋ひて、心も空にたどり行くまゝに、山路にかゝりぬ。

り[illegible]、櫻花咲きみ
り梢に移る鶯の聲
りきて、ある内に、夕
ぬ。あゝおもしろき

高畑君子

れはゐある、眺には

なる茶店の[illegible]、[illegible]の下なる[illegible]野を、一日にか
つめたるこそいはんかたなくなつかしけれ、野守の軒に[illegible]のむれたる
に、紅白の桃のちりみだれたる、いみじうあはれなり。柳の奥に
稲荷の幟のひらめきたる。菜の花の中を牛の通へる。またながし
さるは近きわたりの老いたる若き打ちつれて、ゆたかにゆくは寺
にてやあらむ。あなありがたやなどかたらひつゝも、杖を片手に
もちかへたるは、[illegible]

きて、ある内に、夕
。あゝおもしろき

畠 畑 君 子

れはねある、眺には
になん、ありける。
さは名残りのう打
うすく、こく、おの
たいらんばかりな
、梅の二もと、三
。しこの関邊に、若
さま、云ひしらず
がほに、千代々々
はなく、實に、樂
き日の暮るゝも知
そびなば、一しほ
たのしきながめな

に 紅白の桃のちりみだれたる いみじうあはれなり、村の奥に稲荷の幟のひらめきたる。菜の花の中を牛の通へる。またなかしさるは近きわたりの老いたる若き打ちつれて、ゆたかにゆくは寺にてやあらむ。あなありがたやなどかたらひつゝも、杖を片手にもちかへたるは、さげたるものゝ重きにやあらむ。生きたる佛に手向んさて、心の程をつゝみたるにてあらむ、いかにのどけきねがひならん、さおもひやられて、いさもしくなかしけれ。乙女のかさしに狂ふこてふも、麥生におつる雲雀の影も、ゆたかなる大御代の繪卷物に、おのづからなるけしきをそふるそのさかなりける。

友 近 里 子

花よりしらむひんがしの山きはに、よこ雲ほそく棚引たる、ふりそゝぐ春雨にも、うち出しわかなに、色そふみどりの野邊、げに、長閑きは春の野山の景色にこそ。うらくさはれ渡りたる日、わらひさらんさてわけ入し山路に、おもほえず、三ツ四ツ二つほころびてし櫻花を見いだし、かすみの内より、ほのかにさへつる鶯の聲をきゝたる、あるは、峯にのほりて見渡せば、近くは、みどり美はしき麥畑に、宵き浪のたゝよへるかごさく、黄色なるなの花の、ところどころにさきあめたる、遠くは、白帆かけて走る舟、うす

妹の）

題　　姓名

事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたる沒書とす。

○女子は、なにびとにても、隨意に投稿することを得。

生徒募集

左の各級に入學を許す志願の者

徒募集

在の各級に入學を許す志願の者

迄に履歴書相添願書差出すべし

一、二、三、四年級

一、二、年級

學課程度にして質素着實を主とし我國固

るを旨とす

……しと雖も之を行ふに法ありて其法を敎ふるの良書世に乏しきが爲め知
するもの擧て數ふべからず是啻に個人の不利のみならず抑亦國家の一

足立寛先生、日本赤十字社篤志看護婦人會に講師として會員に講授せ●●●●●●●●
して著作せられたるを上版せるものにして何人にも容易く衞生の要法
愛し家を重んじ世に務むべき道を衞生上に求めんと欲する者は座右缺
●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●
須たれしが今般汎く希望者に布くことゝなり弊所其取次賣捌を許可せ
求めに應ぜんとす請ふ陸續愛讀せられんことを

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

日本赤十字發行所

電話本局千三百七番

…するとあるべし

…等
…種一
…十行
…許し
…く外
…て普
…修せ
…とす

明治の女傑 慈善の泰斗 瓜生岩

一冊定價 金[illegible]
郵税 [illegible]
郵券代用 一割増

世に慈善を以て名あるもの多からざるにあらざれど
る婦女の身にして能く有為の男子を[illegible]を稱
すもの甚だ少し
瓜生岩女は[illegible]たる一婦の身を以て現在に於て[illegible]一日
の如く[illegible]家の女を稱し特に以て天下[illegible]
の[illegible]を描して當代の女傑と稱し[illegible]
義家の泰斗として[illegible]本書は其畢生を叙せ
し者あり大下[illegible]の!一度本書を讀まん[illegible]
に情夫き[illegible]起つべし請ふ!本書を讀め!

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地

發行所 [illegible]